

低カロリー、高たんぱく質、低脂質、減塩、コレステロール0。耳あたりの良い宣伝文句に騙された健康志向の皆様。

あなた方は人類の進化を妨げる異常思想の持ち主だ。

昨今巷で愛される健康的な食事は、原始の人類が自然の中で調達してきた食材と類似したものである。つまり健康的な食事＝体が慣れた食事ということだ。しかし、現代の技術は飛躍的に向上し、自然界から得ることが困難だった物質を大量に産み出し、湯水のように使うようになった。その物質は長い間、得ることが困難だったため、脳はそれ得るために、得たときに褒美を与え、またそれを得ようと体を仕向けていく。もともと少量しか得られなかったものだ、大量に食べれば体は不調をきたす。それが現代食による病だ。

「現代病は悪だ、健康になろう」本当にそうだろうか。健康的な食事は幸福か？思い出してほしい、最高の一口の瞬間を。そのテーブルに並んでいるのはサラダか？いや違うはずだ。

健康的な食事は古来の食事だ。君たちの思う粗悪な食事は未来の食事だ。どちらに適應すべきかわかるだろう。もう一度書こう。健康的な食事を続けるものは人類の進化を妨げている。現代食を食べ続け、幸福を感じながら、それでも健康に生きていける、そんな遺伝子を繋いでいくこそが我々のあるべき姿ではないだろうか。引用…現代食進化論 井田理太

「お待ちせしました」店員がポテトを持ってくる。八瀬（ハチセ）は文章をSNSにポストしてパソコンを閉じた。

目の前に置かれたポテトは神々しいほどにテカリ、焼けた油の匂いが鼻を通り脳に染み渡る。

「いつもありがとうございます」店員の弾けんばかりの笑顔に八瀬が不愛想に会釈する。八瀬の蓄えられた下顎が揺れる。レジへと戻る店員の後ろ姿をじろじろと見つめている。店員がレジに戻り店内に視線を戻すと同時に八瀬は揚げたてのポテトに目を移した。「この瞬間のために生きているのだ」店内BGMの音量をギリギリ超えないように調節した声でそう言うってから手を合わせた。「いただきます」

ポテトの中に突っ込んだ指が熱さで一瞬ぴくっと動いたが、意を決していや、胃を決してポテトを鷲掴み、口に頬張る。口の中がやけどでどうなろうと関係ない。ポテトが来るまで温存していたハンバーガーを頬張る。口の周りがどうなろうと関係ない。幸せだ。問答無用、明々白々、この瞬間が幸せなのだ。奥のテーブルの学生がこちらを見て笑っている。関係ない。口の中のポテトが喉を通る前に、脳はすでに次のポテトを求めている。

欲望のままに次のポテトに手を伸ばした瞬間、カシャッとカメラの音が聞こえて学生の方を見るとカメラが八瀬の方に向けられていた。学生は「やべっ」という表情を浮かべて携帯を伏せた。八瀬も急いで顔を逸らした。恥ずかしさを取り繕うようにケタケタと笑う学生に、大人げなく突っかかるほど子供ではない、という30代のプライドを反芻しながら

らイラ立ちを懸命に抑えていた。ふとレジに視線をやり、店員がこちらの状況に気が付いていないことにほっとした。大人のプライドが勝ったようで、学生たちは席を立った。が、すれ違いざまに八瀬を一瞥して、地獄耳には容易に聞こえる距離感で「笑える」と言っただけで店を出た。あほだ。学生の態度がではない。進化に貢献する自分のような賢者をあざ笑う人間をまた生み出してしまった教育に対しての怒りだ。ああ、怒りでポテトの温度を超えてしまったようだ。ぬるいポテトは躊躇なく口に運ばれる。

学生と入れ違いで入店した2人組の女がトレイを持って横のテーブルに着いた。「あなたのそれなに？」片方の女が言った。

「ザ・ヘルシーバーガー」

「なにそれ」女は小ばかにするように聞いた。(同士か?)

「この新メニューよ、低カロリーで高たんぱく、おまけに食物繊維もとれるんだって」

「この店来てわざわざそんなの食べるかね、まじめだねあんた」(同士だよな?)

「私健康志向なのよ」

「私も今度それにしよう」

ふっ、八瀬が鼻で笑った。二人が一瞬八瀬に視線を移したが、八瀬は急いでハンバーガーを頬張って顔を隠した。

残念だ。残念でならない。健康志向を吹聴するあほがのさばっていることも、それに洗脳されるやつばかりであることも、なにより、現代食筆頭のジャンクさを誇るこの店が愚かにもヘルシー志向にうつつを抜かしていることが残念だ。

携帯がバイブする。八瀬は携帯のメッセージを見て急いでポテトを口の中に詰め込んだ。手を合わせて食事への感謝。「ごちそうさまでした」トレイのゴミを律儀に畳んで1つにまとめ、ゴミ箱に入れた。

出口に向かうとレジから「ありがとうございます」といつもの声が飛んで来た。振り返ると相変わらずかわいい店員の笑顔に、相変わらずぎこちなく会釈した。

「やあ、遅かったな」

「バーガー本社前に到着した八瀬を出迎えたのは、田口だった。」シャツのキャラクターが腹の脂肪で引き延ばされて不細工だ。

「すいません遅れて」

「いや、まだ始まってない。大丈夫だよ。君今日が初めてだもんね」田口の後ろには着々とデモンストレーションの準備を進める集団がいた。旗、プラカード、拡声器、各々が持ち寄った道具はどこか狂気じみている。

皆、自分と同じような境遇なのだ、八瀬は改めて思う。初めてこのグループの会合に参加した時もそう思った。小さいころから太っていて、デブだ、臭いと標的にされ、必死に運動したこともあったが食べることがやめられなかった。自分の自制心の欠如、それが悪いのだとずっと思っていた。しかし、とある学説に出会って考え方は一変した。自制心

がなかったのではない、自分は進化しようとしていたのだ。悪はあいつらだったんだと。

大丈夫か？と八瀬の顔を田口がのぞき込む。

「あ、すいません。大丈夫です。この前の飲み会から、このグループに参加させてもらったばかりで…初めてだから緊張してんのかな」八瀬が乾いた笑声交じりに言った。

「まあすぐ慣れる。はいこれをもってプラカード」田口から渡されたプラカードを言われるがままに手に取った。『原始的食事反対 人類に進化を』

「これを僕が叫ばいいんですか？」

「まあそうだね。なにも持ってきてないんだろ？それとも他に言いたいメッセージでもあるのか」

八瀬は首を振った。

リーダーの合図でデモが始まった。健康食品やめろー！というリーダーの拡声器の後にグループが復唱する。八瀬はその復唱に声を合わせる。人類の進化を妨げるなー！人類の進化を妨げるなー！ノーモアヘルシー！ノーモアヘルシー！

「もっと声出せよ」田口に小突かれる。「すいません圧倒されちゃって」八瀬が答える。

警察が遠目にこちらを見ている。八瀬はそれに気が付くと「田口さんまずいですよ、あそこに警察が」と田口に言うが、「え？」と聞き返されたので、躊躇しながらその脂ぎった顔に近づいて「警察がいます！」と言った。田口は「申請してるから見回りに来たただけだよ」と軽く答えた。

「申請とかあるんですね」

「お前何も知らないんだな。そういうのは山城がやってくれた。捕まりはしない」

「そうなんです。勉強になります。そういえば今日山城さんは？飲み会でも優しくしてもらって」

「あーしんだよ」

「しんだ？」

「進化の一部となったんだ」

健康食品やめろー 健康食品やめろー 人類の進化を妨げるなー 人類の進化を妨げるなー

懸命な叫びは続く、その日は季節外れの炎天下だった。ビルが反射する太陽の熱で集団から水蒸気が上がっている。脂汗の匂いが充満して息苦しい。

その時、集団の中で誰かが倒れた。「先生」「先生！」とそこを囲むメンバーから声が上がった。集団の内側の方だ。八瀬は背伸びでそこを覗いた。

「先生」「先生！」集団は静まり返る。

「大丈夫だ…私は大丈夫だ」息切れの中で必死にそう答えている。この集団で先生と呼ばれるのは、井田理太だけだろう。井田は某大学の教授でこのグループの根幹理念である現

代食進化論を提唱している張本人である。ゼエゼエと気管を息がこすれる音がしばらく続き、井田は内ポケットから取り出した薬を口に放り投げて水で流し込んだ。あふれた水が2重顎を伝って、ワイシャツの襟を濡らしている。「すまない、大丈夫だ」

「先生」「先生…」集団の中にはすすり泣くものすらいるようだった。

「みな、聞いてくれ」井田は集団に囲まれながら語り出した。「死を恐れなくてくれ。私の死を、そして自らの死を。進化と言うのは迷路の行き止まりを1つずつぶつけていく作業である。山城君の死もまた一つ行き止まりを教えてくれた。私の屍も行き止まりを示す標識になろう。次の世代が先へ進むための標識となるのだ。より幸せな生活を後世の者が送れるように。私たちが人類を新たな姿に導くのだ」

誰かが鼻をすする音が鮮明に聞こえるほど静まった集団に、どこからかカメラのシャッター音が通り抜けた。

通行人から向けられたカメラを見つけ、八瀬はプラカードと共に顔をそむけた。通行人はもう何度かシャッター音を響かせて去って行った。八瀬はその音が止むと顔を上げた。すると集団の視線は八瀬一人に向けられていた。

リーダーが集団をかき分けて八瀬のもとへ出てくる。「なぜメッセージを隠した」

八瀬は、あ、と声にならない音を出し、頭が真っ白になった時に出るデヘヘという笑い声とともに顔を赤らめた。

「なぜメッセージを隠したと聞いているのだ。通行人のカメラはわれわれのメッセージを世界へと拡散するきっかけになるかもしれないのだ。ひいては進化のきっかけとなる。貴様、カメラに映るのは恥ずかしいなどと思ったわけじゃあるまいな。先生のお言葉を聞いた。我々がどれほどの覚悟でここにいるのかわかっているのか」

「いや、あのこういうの初めてで…」八瀬は田口を探して助けを求めた。が、田口は周りの集団と全く同じ色の視線で八瀬を睨んでいる。「すみませんでした」八瀬は今まで一番深く頭を下げた。赤らんだ顔に血が溜まりさらに赤くなっていく。また一人になりそうだ…。

「八瀬君」

八瀬がびくつと顔を上げる。「名前…」

「もちろん覚えていさ。君は仲間だろう。君もつらかったのだろう。ここにいる皆は君と同じだ。もうとっくに気が付いているのだろう、皆の思いが君とともにあることを。我々は同士であることを。さあ顔を上げて。その凛とした表情を通行人に見せてやろう。新人類の顔を見せてやろう。さあ掲げろ、そのメッセージを、通行人に向けて、掲げろ、掲げろ」リーダーの声に八瀬の胸の中の脂肪が燃え上がる。

「掲げろ」「掲げろ」「掲げろ」リーダーに続く集団の音頭が八瀬を囁し立てる。

八瀬は汗が滲んで力の入らない手で、プラカードを握りしめていた。背中にも汗が伝っていくのがわかる。

「原始的食事反対 人類に進化を！」八瀬はプラカードを高く掲げ叫んだ。

その視線の先に、あの店員がいる。集団からは拍手が上がっている。集団の中の誰かの脂ぎった太い腕に肩を抱かれる。

その視線の先のあの子が、ふっと鼻で笑った。嫌悪感がにじみ出た顔で八瀬を見た。

もう関係ない。あんな女は関係ない。「原始的食事反対 人類に進化を！」「原始的食事反対 人類に進化を！」「原始的食事反対 人類に進化を！」連呼するたびに拍手が一層大きくなる。八瀬は幸せだった。

自分を否定してきた者たちは皆、人類の進化を妨げる者たちだ。人目を気にする必要はない。自分はあるべき姿をしている。それを認められないあの店員は未来に必要な存在なのだ。グループにいる女は八瀬に魅力を感じていないようだし、八瀬もグループ女に魅力を感じないが、まだ適応できていないだけだ。これがあるべき姿なのだ。なんて世界は素晴らしいのか、幸せだ。

あれ、遺伝子の残せないじゃん、と気が付くまでその幸せは続いた。